

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13838

研究課題名（和文）近代日本の高等教育機関における林学教育と森林行政及び地方林産業に関する歴史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study on Forestry Education, Forestry Administration, and Local Forestry Industry in Modern Japanese Higher Education Institutions

研究代表者

佐々木 朝子（Sasaki, Tomoko）

北海道大学・大学文書館・特定専門職

研究者番号：70830644

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：東北帝国大学農科大学林学科（1908年設置）の学科目は東京帝国大学農科大学の学科目をもとに編成された。学科目は1910年、1913年に改正され、「殖民学」「森林昆虫学」「森林美学」など、東京帝国大学には無い独自の科目が増加した。卒業生は、森林経理学、造林学、森林利用学を専攻する者が多く、母校に教官として残ったのは森林経理学、造林を専攻した卒業生であった。

札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設の林学課程の卒業生1,059名の進路状況について、同窓会誌より1903年～1917年の勤務先を集計したところ、多い勤務先は山林局が管理する大小林区で、ほかには帝室林野局、朝鮮総督府、北海道庁が多い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、高等教育機関において教授される「林学」と、卒業生が携わる「林産業」との間を、卒業生の大学史の立場からつなぐことを試みた。対象となる教育機関のうちの一部ではあるが、東北帝国大学農科大学林学科の学生、及び付設の林学課程の生徒について、在学から卒業後に至るまでの基礎的な状況を、卒業論文題目の一覧、勤務先の人数一覧等、具体的に整理した。

研究成果の概要（英文）：The Department of Forestry, the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, established in 1908. Subjects were organized based on the subjects of the preceding Department of Agriculture, Tokyo Imperial University, and then revised in 1910 and 1913, "Colonization Studies", "Forest Entomology", "Forest Aesthetics", etc. Many of the graduates were advanced in forest accounting, afforestation, and forest utilization, and those who remained as instructors were graduates who majored in forest accounting and afforestation.

Regarding the career paths of 1,059 graduates of the forestry course attached to Sapporo Agricultural College and the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, when we tallied up the places of employment and places of work, the largest number of people worked at the Forestry Bureau, followed by the Governor-General of Korea and the Hokkaido Government Office.

研究分野：教育史

キーワード：帝国大学 林学実科 林学 卒後進路

1. 研究開始当初の背景

(1)1880年代～1940年代における林学の高等教育の沿革

近代日本の森林管理や林産業は、ドイツ林学を受容した林学に基づく。林学の高等教育は、ドイツで林学を学んだ松野礪による東京山林学校の設立(1882年)にはじまった。東京山林学校は、駒場農学校との統合による東京農林学校設置(1886年)を経て、帝国大学に農科大学として合併された(1890年)。帝国大学農科大学には林学科及び林学科乙科(1898年「実科」に改組)が設置された。以後、林学の高等教育は、農学の教育機関の一部として展開した。札幌農学校は、森林科(1899年設置、1905年に林学科に改称)を付設した。1907年に東北帝国大学農科大学として帝国大学に昇格すると、林学科が設置された。なお、付設の林学科は林学実科と改称された。

1900年代以降、林学科を備えた高等農林学校の新設・増設が相次いだ。まず盛岡高等農林学校(1902年)、鹿児島高等農林学校(1908年)が設置され、1920年代には鳥取高等農業学校(1920年設置、1942年林学科を設置)、三重高等農林学校(1921年)、宇都宮高等農林学校(1922年)、岐阜高等農林学校(1923年)、宮崎高等農林学校(1924年)が相次いで設置された。

帝国大学では、1922年に京都帝国大学が、1924年に九州帝国大学が農学部林学科を設置した。

なお、植民地となった地域にも、水原高等農林学校(朝鮮、1910年)、台湾総督府農林専門学校(台湾、1918年)が設置された。台湾総督府農林専門学校は、1922年に台北高等農林学校、1925年に台北帝国大学農林専門部に改編された。

上記の林学を教授する高等教育機関には、学生・生徒の実習に供することを目的として演習林が設置された。高等農林学校の演習林が近隣に設置されたのに比べて、帝国大学は近隣の演習林に加えて、樺太、台湾、朝鮮等の遠隔地にも演習林を設置する点に特色がある。遠隔地の演習林は、研究利用、大学財政等の設置理由が指摘されているが、学生の調査研究、実習にも利用された。

帝国大学を卒業した林学士は、山林局や帝室林野局等の林業に関連する行政機関や民間企業において技師として実務を担うほか、教育機関で林学を教授するが多い。高等農林学校や林学実科を卒業した林学得業士は、行政機関や民間企業において、技手として実務を担う場合が多い。

(2)本研究の着想、位置づけ

近代日本における林学を受容と展開については林学史の分野で、林産業の展開については林業史の分野で先行研究の積み重ねがある。本研究は、林学を教授し、かつ、卒業生が森林管理や林産業に携わる、帝国大学農学部林学科と高等農林学校に着目する。

実際の教育内容について、各高等教育機関の後身校が発行する大学の年史に記述が見られる。重点は林学科の講座編成・研究分野にある場合が多いが、教育についても触れられている。また、演習林で沿革史を刊行している場合には、学生生徒の研究や実習についての記述が見られる。以上の先行研究を踏まえつつ、研究を進めることとする。

2. 研究の目的

日本の国土の大半は山林であり、林業は農業とともに、近代日本における重要な産業であった。「林学」は、山林の管理と山林に関連する産業(林業、木材産業、製紙産業等)を支える学問領域であり、林政学、造林学、森林保護学、森林利用学、砂防工学、森林経済学等といった、農学、工学、経済学等の諸領域に重なる、複合的な学問である。

本研究では、演習林での実習を含め、高等教育機関における林学教育と、林学教育を受けた学生・生徒の卒業後の林業分野での取り組みを調査し、高等教育機関における林学教育と後の職業生活との連関の可能性を検討する。

林学以外にも広く利用されるようになった今日の大学演習林のありように対しても有意義な視点を与え得るものと考えらる。

3. 研究の方法

1880年代～1940年代に林学の高等教育を担っていた帝国大学農学部林学科と、高等農林学校及び帝国大学付設の林学実科について、(1)各教育機関が発行していた『帝国大学一覽』等に所載の規程、学科目、卒業後の進路を示す統計等の基礎情報を調査する。

(2)帝国大学農学部林学科については、後身校である東京大学、北海道大学、九州大学、京都大学の大学アーカイブズにおいて演習林の利用を示す簿冊や学生の受講ノート等を実見する。

(3)卒業後の進路については、各教育機関の後身校の大学アーカイブズや附属図書館が所蔵する同窓会誌には、会員の近況や居住地域の情勢等が寄せられており、卒業後の状況が判明する。札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学付設の林学教育機関の同窓会「札幌林学会」

発行の『シルバ会札幌林学会会員名簿』については悉皆調査を行い、うち札幌農学校及び東北帝国大学農科大学林学科卒業生の勤務地、勤務先別人数を調査した。また、各帝国大学で発行されていた大学新聞には、卒業生の就職状況が記事化されているため、資料調査の対象とする。

高等農林学校及び帝国大学付設の林学実科は、後身校の現地調査や図書館等のデジタルデータを活用し、前身校発行の刊行物や同窓会誌を収集する。

(4)山林局発行の『林友会報告』『林友会月報』、帝室林野局発行の『御料林』等、勤務先が発行する雑誌には、人事異動職員の寄稿が掲載されており、卒業生の勤務先での動向が含まれており、資料調査の対象とする。

なお、水原高等農林学校、台湾総督府農林専門学校については、現地調査の可能性を探るため、国立公文書館、国立国会図書館等、国内での調査を中心に行う。

4. 研究成果

林学の高等教育を教授する帝国大学、高等農林学校について資料の所在確認と収集を実施し、東北帝国大学農科大学林学科と、付設の森林科・林学科・林学実科について検討した。

(1)東北帝国大学農科大学林学科

林学科を備える東京帝国大学農学部、東北帝国大学農科大学（1918年より北海道帝国大学農学部）、九州帝国大学農学部（1919年設置）、京都帝国大学農学部（1923年設置）の学科目は、1919年東京帝国大学農学部林学科の学科目の変更を画期として、学科目をほぼ必修科目が占める1919年以前と、選択科目が組み込まれる1919年以降に分けられる。

1919年以前の東北帝国大学農科大学林学科のカリキュラムは、1907年の設置時に「東北帝国大学農科大学規則」中で定められた。1907年に定められたカリキュラムは第一期生が入学した1910年に改正され、「森林動物学」が「応用鳥学」と「森林昆虫学」に分割されるなど、動物学に関する科目が細分化されたほか、第二年から第三年にかけて並行して課されていた「森林利水及砂防工学」「森林保護学」「森林管理学」は、第二年で「森林理水及砂防工学」が、第三年で「森林保護学」「森林管理学」が課されるように変更された。また、随意科目に「殖民学」が追加された。1913年にはカリキュラムが再度改正され、「森林美学」が追加された。東北帝国大学農科大学林学科の学科目は、東京帝国大学農学部林学科の学科目を基に編成されたが、1910年、1913年に改正を重ねるにつれて、「応用動物学」が「森林昆虫学」と「応用鳥学」に細分化され、講義時間数も増加するほか、札幌農学校以来の「殖民学」、新島善直による「森林美学」等、東大には見られない科目が増加する。

林学科の担当教官は、主に帝国大学（東京帝国大学）卒業生であり、東北帝国大学農科大学の卒業生で教官となったのは、1914年に大学院を卒業、助教授となった中島広吉が最初である。卒業生の専攻分野の傾向を示すものとして卒業論文題目に注目し、題目一覧を作成した（「東北帝国大学農科大学林学科学生の専攻分野と卒業進路」、『北海道大学大学文書館年報』第17号、2022年3月）。卒業論文では、造林学や森林利用学を扱う論文が多く見られる一方で、理水・砂防工学に関する卒業論文は2本に留まっており、専攻分野に偏りがみられた。また、東北帝国大学農科大学で助教授や助手として勤務を開始した卒業生は、森林経理学や造林学を専攻した学生であった。理水・砂防工学を専攻した2名は大学院に進学した。

東北帝国大学農科大学林学科卒業生の専攻分野は、森林経理学、造林学・森林保護学、森林利用学に偏っており、教授がいない理水及び砂防工学の専攻者は2名に留まった。卒業後、教官として母校に留まった卒業生は森林経理学や造林学・森林保護学の専攻者であった。

(2)帝国大学付設の林学実科

札幌農学校、東北帝国大学の付設林学課程では、1902年10月～1945年6月までの間に1,059名の生徒が卒業した。『札幌農学校一覧』等所載の統計（1902年10月～1934年9月）によると、卒業後に最も多いのは官公庁勤務者で、以下、会社員、教育機関勤務者、実業従事者の順に多い。また、同窓会会員名簿により、卒業生の1907年1月～1917年1月の勤務先的人数一覧を作成し、「札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設の林学課程の卒業生の動向について」（『北海道大学大学文書館年報』第16号、2021年3月）に掲載した。農商務省山林局、宮内省帝室林野局、鉄道院等の府省、台湾総督府、朝鮮総督府、樺太庁といった外地の官公庁、北海道庁などの地方自治体があり、多くは「技手」を務めていた。最多は山林局勤務者で、全国の大小林区署に務めていた。他方、帝室林野局勤務者の勤務地は北海道内に偏る。他に勤務者が多いのは朝鮮総督府や北海道庁で、年によっては20人以上にのぼる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐々木朝子	4. 巻 16
2. 論文標題 札幌農学校・東北帝国大学農科大学付設の林学課程の卒業生の動向について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道大学大学図書館年報	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木朝子	4. 巻 17
2. 論文標題 東北帝国大学農科大学林学科学生の専攻分野と卒後進路	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道大学大学図書館年報	6. 最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木朝子	4. 巻 18
2. 論文標題 東京帝国大学農科大学・東北帝国大学農科大学における林学科の学科目編成について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道大学大学図書館年報	6. 最初と最後の頁 77-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

北海道大学大学文書館年報
<https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/publication.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------